

目で見る都留市の歴史

都留郡小山田氏

小山田氏は関東八平氏の一つ、秩父氏の分れで、秩父荘司重弘の子有重が武蔵多摩郡小山田庄に拠って小山田氏を称したのに始まる。承久の乱に武田信光の配下に小山田太郎の名がみえるので、鎌倉時代にその一族がすでに甲斐に移っていたことが知られる。

「甲斐国志」によると、都留郡小山田氏の祖は武州小山田別当有重の子、小山田五郎行平（行重）としているが、文献上では明らかでない。

小山田富春（弥二郎と思われる） 延徳年間（1390～94）

都留郡小山田氏が文献上明らかになるのは、明徳年間（1390～94）都留郡金井（当時中津森）の桂林山富春寺（始め曹洞宗、現臨済宗）の開基小山田富春のときからである。

『鎌倉大草紙』に「小山田弥二郎の女が武田信満に嫁す」とある。小山田富春が弥二郎と考えられるので、富春の女が信満に嫁ぎ14代武田信重を産んだことになる。

応永23年（1416）前執事の上杉禅秀（氏憲）が関東管領（鎌倉府）足利持氏に不満をもち乱を起した。甲斐・安芸両国の守護であった武田信春の子信満が、小舅にあたる上杉禅秀に味方して敗れて甲斐に逃げ帰り、都留郡で防戦したが木賊山（東山梨郡大和村）に入って自害した。墓は天目山栖雲寺にある。

小山田信実

桂林山富春寺の金山観音（郡内観音霊場30番札所）は、如意輪腹籠り1寸7分、平弥三郎信実が守本尊として懐中にしていた霊仏で、城廊より出現したといわれている。

小山田信光

明治19年富春山桂林寺より本山に提出した書類の中に本尊薬師如来（或いは釈伽如来）の台座に「小山田信光」の名が刻んであったといわれている。

小山田信長（耕雲と思われる）

『甲斐国志』に向富山用津院（金井）の開基は小山田耕雲とあるが、年代的に考えて耕雲は信長と思われる。

『妙法寺記』の延徳4年（1492）に「此年6月11日、甲州乱国ニ成始ル也」とある。小山田信長の妹が16代武田信昌に嫁いで油川信恵を産んだといわれている。のちに17代となった武田信縄と、弟の油川信恵との家督争いに、小山田信長と同弥太郎（信長の子と考えられる）は、血族の信恵側について、信縄と、その子信虎（18代）と争うことになった。「乱国ニ成始ル也」はこの争いを意味している。この争いも明応7年（1498）に和解が成立した。

小山田弥太郎（義山と思われる）

永正4年（1507）武田信縄が死去し、14歳の信虎が武田の家督を相続したが、叔父の信恵父子は、都留郡の小山田弥太郎をはじめ、国中の味方する者と幼主に反旗をひるがえして信虎と合戦したが、信恵親子、小山田弥太郎は討死し、小山田平三（のちの越中守信有と思われる）は葦山の北条早雲のもとへ逃れた。

小山田越中守信有（号契山）

永正7年国中と都留郡との争いも和睦が成立し、信虎の妹が小山田越中守信有に嫁した。

永正17年（1520）岩殿七社権現の棟札に「都留郡守護平信有」とある。

大永7年（1527）「中津森ノ殿様（越中守信有）百坪ニ御家造り玉フ」

享禄3年（1530）3月中津森の館が炎上。

享禄5年（1532）谷村へ居館を建て一族郎党と移る。

天文10年2月14日死去、号契山（長生寺殿羽州大守契山存心大禅定門）

小山田出羽守信有（越中守信有の子）天文10年（1541）～天文21年（1552）

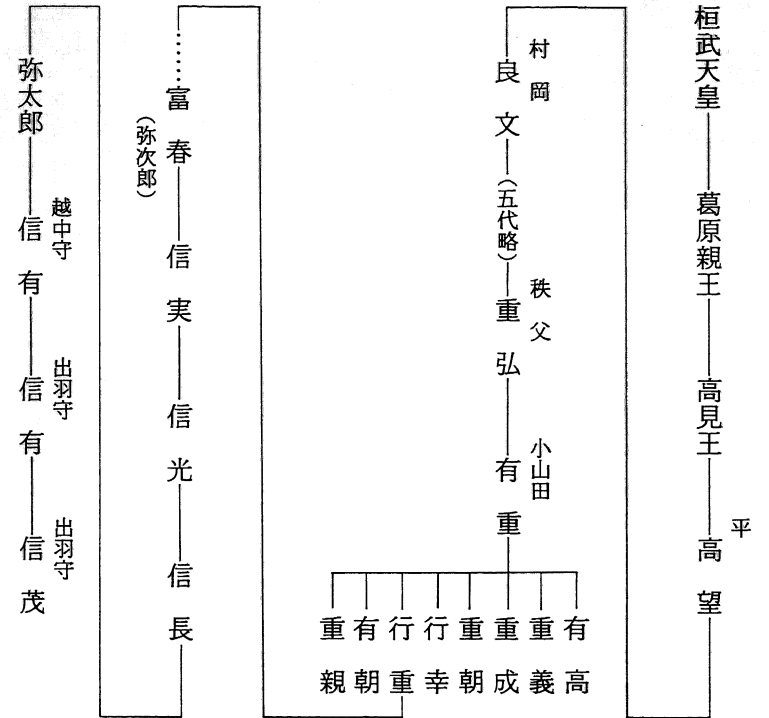
『妙法寺記』に「天文21年正月23日、出羽守信有死去、葬式御共衆1万人」とある。号桃隠、常膳院桃隠宗源大禅定門。

小山田出羽守信茂（出羽守信有の子）天文21年（1552）～天正10年（1582）

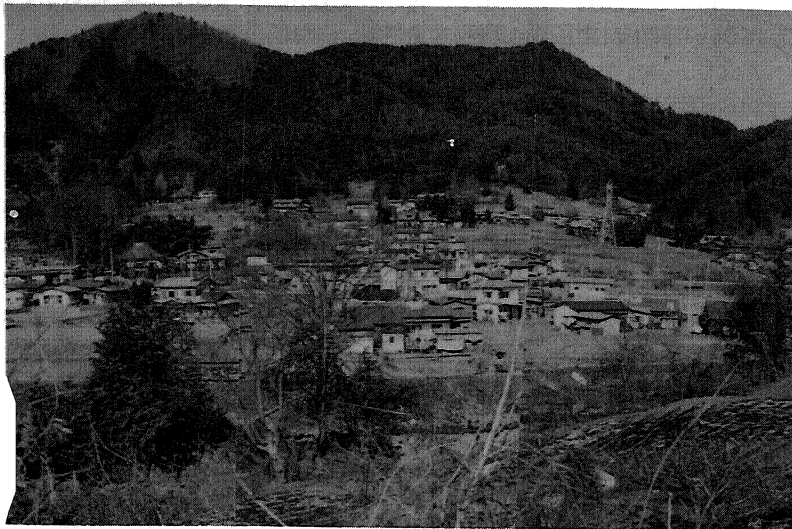
天正10年3月11日 武田勝頼天目山で自害。

天正10年3月24日 信茂妻子、母と共に織田氏のために甲府善光寺で殺される。号武山。靈正院逸嶺現存定門。

小山田氏は武田氏に対し、親族衆の巨頭として都留郡守護の自覚のもとに郡内の支配権を維持し、武田の全盛時代の信玄の政治力をもってしても完全には直領化しえず、二重の支配構造を許す間接支配地域として存置せざるを得なかった。武田の滅亡時に、勝頼の支配から離脱したのも、かねてから領国支配の意識を強くいただいていたからである。



小山田氏系図



小山田氏中津森館址

『勝山記』に「大永7年(1527)中津森の殿様百坪ニ御家造り玉フ」とあり、『甲斐国志』には、「小山田氏旧址ハ用津禪院ノ東ニ在リ、里人ハ今モ御屋敷ト呼ブ、外郭ノ溝涯処々ニ残り存シタルヲ土居堀ト字ナセリ」とある。現地調査の結果では、用津院と桂林寺の間の台地に建てられていたと考えられる。

享禄3年(1530)3月中津森の館が炎上したため、政治、経済、軍事的な面を考慮して、天文元年(1532)谷村に新居館を建てて移った。館の位置は、明確な文献が残されていないが、小山田氏以後の歴代城主の居城からして、現在の谷村第一小学校の位置であったことが推察される。また、長安寺の場所が小山田氏の別荘だったといわれている。

『甲斐国志』に「岩殿山は要害城ニシテ居館ハ谷村タルコト明ナリ」とある。しかし、越中守信有が谷村に居館を移した時代から、桂川を隔てた勝山城を要害城としていたことが、最近の調査で明らかになってきた。

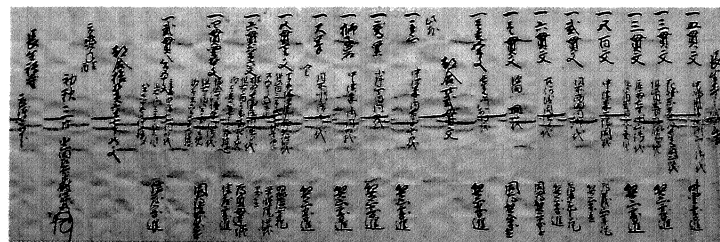
小山田越中守信有画像

『長生寺文書』に「契山存心像一幅信茂納之」とある。文政10年(1827)5月、水府侍臣裔孫小山田勝益が画像を修復した後、現在に至っている。

昭和55年4月都留市文化財に指定されている。



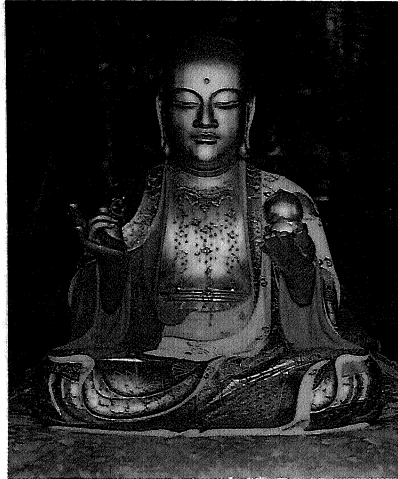
小山田越中守信有画像



小山田信茂寺領寄進状

小山田兵衛尉信茂長生寺領寄進文書

元龜4年(1573)7月3日、小山田信茂は、菩提寺大儀山長生寺に、自身を含めて祖先(耕雲、義山、涼苑、契山、桃隠)以来の寺領都合41貫675文の書立をあたえている。この文書は、都留郡小山田氏の系図を知るためにも大切な資料で、昭和54年4月都留市文化財に指定されている。



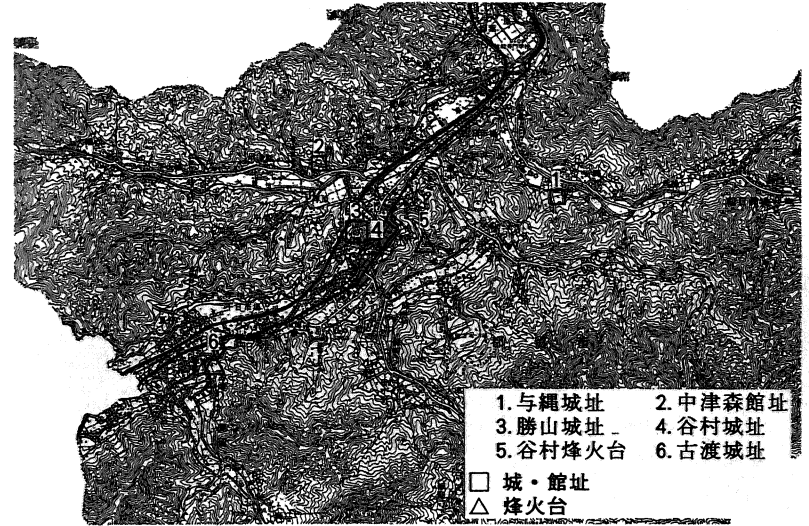
広教寺地藏菩薩座像

広教寺本尊地藏菩薩座像

本尊延命地藏菩薩は、木彫座像で、像長63センチメートル、座底に「明德元年（1590）6月16日、重吉在判歳23」と記されている。

また台座には「明德元年4月23日、法眼院嘗謹作」とあり、広教寺記には七条法眼とある。

年代が明記されているものでは、現在市内で一番古いもので、昭和52年6月都留市有形文化財に指定された。



都留郡小山田氏の館と城郭

- | | |
|----------|----------|
| 1. 与繩城址 | 2. 中津森館址 |
| 3. 勝山城址 | 4. 谷村城址 |
| 5. 谷村烽火台 | 6. 古渡城址 |

□ 城・館址
△ 烽火台

広教寺の鑿子(銅鉢)

広教寺の鑿子に、「元弘元辛未年（1331）8月上旬」と刻まれている。鑿子はお寺の勤行のとき打ち鳴らす金銅でつくった鉢型の仏具である。

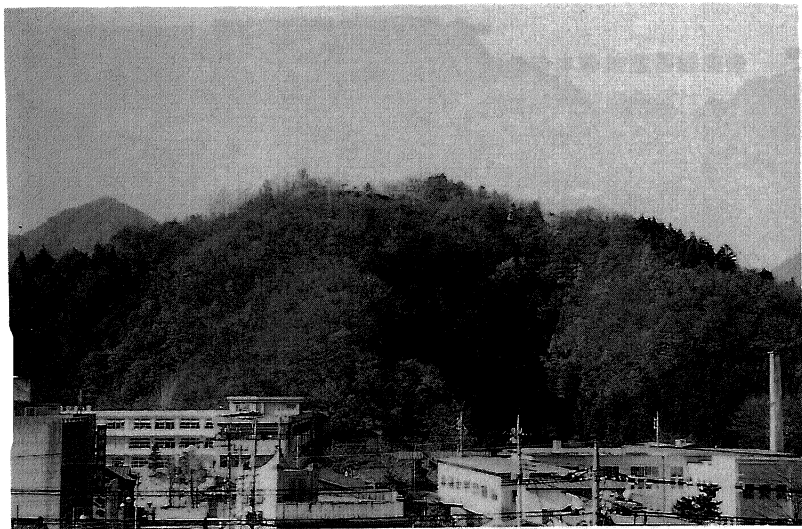
また広教寺には、寛文10年（1670）に出版された大般若経600巻があり、市の有形文化財に指定されている。



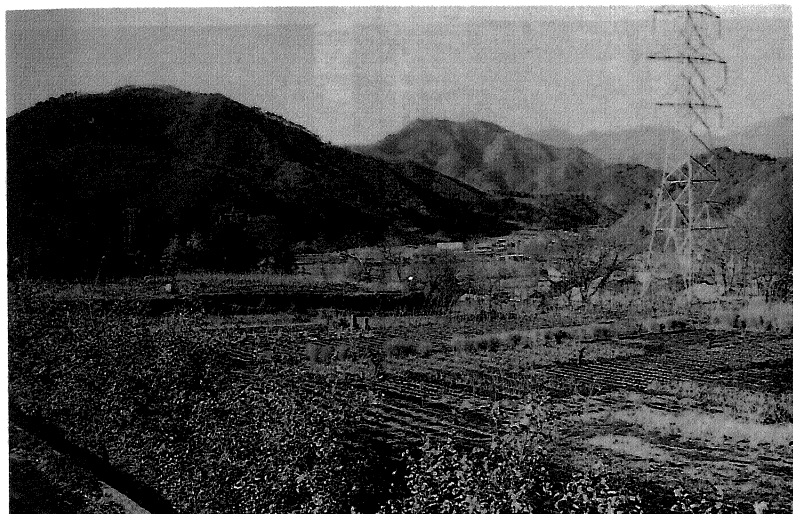
広教寺の鑿子

明德年間（1390～94）領主小山田富春が開基となり、中津森（現金井）に菩提寺として富春山桂林寺を建立しているのので、すでに小山田氏の館があったことが知られる。

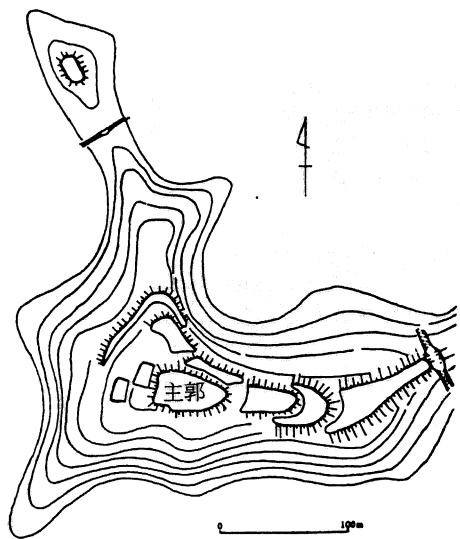
谷村に館を移した越中守信有は、城山（勝山城）を要害城とし、吉田口には一族の小山田禅正を境に配し、大月口には、その子出羽守信有を駒橋に配した。国中、秋山方面の間道警備には、大幡、与繩に兵を配して守備したことが推察される。また非常の場合に備えて、円通院の裏山、鹿留の古城山などの要所に烽火台（出城）が配置されて、火急の状況が谷村館に通報された。



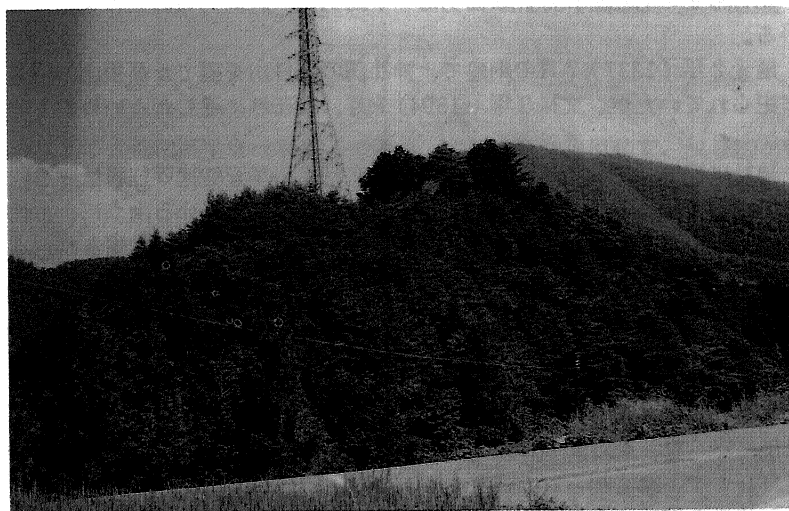
勝山城



与繩城址



谷村烽火台



古渡の古城山